

館林キリスト教会 デボーションノート（2009年）

9月 1日 今日の通読箇所 詩篇104篇10～31

「自然界の歌」

これは自然界の壮大な美しさを歌った最高の詩だ。神の造られた山や野、空や海に、神の養い守られる生物が満ち満ちて、それぞれ喜々として生活している。何とすばらしい世界だろう。神は花を咲かせまた散らし、生物は生まれ生活しやがてその生を終わって行く。彼らは神の摂理の中で、思い煩うことなく逆らうことなく、感謝と賛美に明け暮れつつ、日々を豊かに生きている。自ずから「空の鳥、野の花を見よ」という、キリストの言葉も思われるのだ。

9月 2日 今日の通読箇所 詩篇105篇1～15

「契約の神」

これは「神がいかにかその約束を忠実に守りたもうか」ということを、イスラエルの歴史の回顧によって確認する詩である。アブラハムを始め先祖たちは一片の土地も持たぬ遊牧民として、カナン、エジプトの間に放浪した。弱く心細いその日々、神はご自身のお約束通り忠実に先祖たちを守りたもうた。その神の恵を思う時に、いつでも我々の信仰と勇氣は新しく回復するのだ。

9月 3日 今日の通読箇所 詩篇106篇1～23

「失敗の歴史」

イスラエルの歴史は、ある面では失敗と忘恩、また神の憐れみと許しの歴史だ。この詩は丁重にその事実を歌っている。それ故真に聖書を読むイスラエル人は決して民族的優越感や選民意識を持つはずではなかった。彼らに謙遜な悔い改めを勧めた、ヨハネ、キリスト、ステパノなどを、プライドにこだわって殺したユダヤ人は、実は聖書に対して盲目だった。そしてその高慢はついに国を失わせるに至ったのだった。

9月 4日 今日の通読箇所 詩篇107篇17～31

「五つの歌」

この詩篇は「どうか彼らが主のいつくしみと、人の子らになされたくすしきみ業とのために、主に感謝するように」という折り返しによって区別される五つの歌からなっている。交読される部分は、病気と死の恐れ、また海で操業する漁師たちの、恐しい遭難からの救いが歌われている。生活のために止むを得ず危険な仕事に当る者もいる。しかしそれを避けて安全な家にいたとしても病気

には襲われる。誰でもいつでも常に主の保護を祈る必要があるのだ。

9月 5日 今日の通読箇所 詩篇 108 篇 1 ~ 13

「再臨の備え」

「我が心は定まりました。私はしののめ(明け方の空)を呼び覚まします」というのは、主の再臨を迎える準備が整った魂の歌だと昔から言われる。神を信ずる者でも再臨の時主にお目にかかることを思えば、恐れと恥を感じず。しかし心と生涯の準備のできた詩人は、キリストにお目にかかる光栄と愛と喜びと期待に心燃え、祈りによって証によって、あるいは伝道によって、むしろ「再臨の日を早める」努力をするのだ。「アアメン主よきたりたまえ」と。

9月 6日 今日の通読箇所 詩篇 109 篇 1 ~ 15

「呪いの詩篇」

世のなかには混乱を極めて、所謂「石が流れて木の葉が沈む」「善人は若死にする」ような現実がいかに多い。そういう世の中で横暴な者の被害を感じずる人が、自分には神の恵を求め彼らには神の裁きを訴えるのも正義感の表われである。この詩篇に旧約特有の「呪いの言葉」が多いのも、その心境の結果なのだ。やがて新約の啓示において初めてキリストの「あなたの敵を愛し、彼のために祈れ」という崇高な修正と、教えが与えられることになるのだ。

9月 7日 今日の通読箇所 詩篇 110 篇 1 ~ 7

「救い主の予言」

(1 節)はキリストの復活の予言として使徒行伝 2 章に、(4 節)は復活昇天後のキリストの執り成しの祈りの予言として、ヘブル書 7 章に引用されているなど、これは救い主を予言する有名な詩篇だ。また(2、3 節)にはキリストの再臨の栄光と世界のご支配が歌われている。昔も今も神を信ずる者にとって、何と心踊る詩篇だろうか。

ダニエル書について 解説がある箇所を通読しましょう。

9月 8日 今日の通読箇所 ダニエル書 1 章 1 ~ 7

「捕虜ダニエル」

ユダの捕虜の中でも、貴族の師弟で、教育もあり容姿も美しい者は、強制労働などにコキ使われることをまぬかれ、バビロン風の再訓練のあと、宮廷に仕えさせられることになった。ダニエルたちもその中に選ばれたのである。ローマ

がギリシャを征服した時にも、奴隷にされたギリシャ人の方が、主人のローマ人よりも、はるかに教育があった。というようなケースが、いくらもできた。さてこれが、ダニエルたちにとって幸運であったかどうか。とにかく彼らは、立場の弱い捕虜の身で、バビロンの偶像に由来する文化や生活を学習させられることになり、しかもその間、自分の信仰を守らなければならなかったのだ。

9月 9日 今日の通読箇所 ダニエル書 1章8～21

「ダニエルの「ノー」」

偶像に供えた肉を食べるのはバビロンで一般的なことで（ギリシャでも）それをことわれば、早速蛋白質不足になる。しかしダニエルは結果を神にまかせ、断固たる決意をもって、命がけで、その肉を食べることを拒絶した。しかし神はその間にも「耐えがたい試み」には会わせ給わなかった。すでにダニエルらは、その証の生活によって、責任者である宦官の長の信頼と愛顧を得ていたのだ。そこでダニエルたちの申し出は聞き届けられ、暫くの期間、経過をテストしてみることになった。神様のお守りによって、ダニエルたちは、別に栄養不良におちいることもなく、ほかの少年たちにくらべても血色が良かったから、テストの結果は上々と言うべきで、本当に神様は試練に際していつも「のがれる道を備えて下さる」のだ。実は案外、逆にダイエット的効果があったかもわからない。

9月10日 今日の通読箇所 ダニエル書 2章1～24

「大王の夢」

バビロンは古代における、最初の世界帝国だと言われる。今その国を立て上げたネブカデネザルの満足や思うべしである。しかしその反面には、ここまで成功してくる間に、運命か、神の加護か、摂理か、そういうものを感じること多く、決して自力だけで成功したわけではない、という感慨にも誘われたと思う。また今後は万事裏目に出て、言わば逆に見放された場合、自分はどうなるか、自分の帝国はどうなるか。先ゆきのことは誰にもわからない。それらの複雑な思いからか、ある夜王はまことに壮大な、しかも恐ろしい夢を見た。不安に耐えない王は早速翌朝、学問宗教その他で王に仕えている顧問たちを召集して、夢の意味の解明を求めたが、実力テストのつもりか、夢の内容そのものも話さないから、さあみんな困った。短気な王は激怒する。何をやり出すかわからない。災難は、今は同じく学問をもって王に仕えているダニエルたちにも及んで来る。

9月11日 今日の通読箇所 ダニエル書 2章25～49

「夢の解明」

ダニエルたちは心を合わせて神様に祈った。そして神様から、王の見た夢そのものと、その意味を示して頂いたので、翌日それを王に申し上げることができた。もともとこれは、神様がネブカデネザル王の心境を用いて、その夢の中に啓示された、世界帝国の推移のプログラム、プランニングなのである。神の摂理のうちに、バビロン、ペルシャ、ギリシャ、ローマ、その他、時代時代に役目を持つ世界帝国が起こる。同じく摂理のうちに、それらは次々に滅び、最後に神とキリストによる神の国が現出する。そのことが、巨像の夢の中で示されたのだ。これがダニエルによって解明され、そして聖書の中に記録されること。その預言の成就こそ、聖書が「神の言葉」であることの客観的証明ともなり、神を信ずる者に対する「世界歴史の時計」の役目となること、これこそ最初からの神様のみ心だったのだ。

9月12日 今日の通読箇所 ダニエル書 3章1～15

「金の巨像」

ネブカデネザル王は、非常に恐れ、平伏してダニエルの神をあがめた。そしてダニエルらに多くの贈り物を与え、ダニエルをバビロン全州の総督兼、全顧問官の長とし、シャデラク以下の友人たちをも、それぞれ高位高官に任じたのである。しかし人間の気持ちは複雑だ。彼は自分が「夢の中の巨像の、金の頭に当る」というダニエルの言葉に気を良くして、今、ドラの平野にその金の巨像を立てさせた。幅が2.5メートル、高さ250メートルと言うから、今、ロンドンにある、ネルソン像みたいなものだったろう。そして国中の人に命じてこれに礼拝せよということになった。

9月13日 今日の通読箇所 ダニエル書 3章16～30

「たといそうでなくても」

この時ダニエルは不在で、友人のシャデラク、メシャク、アベデネゴが、金像の落成式に出たが、これを礼拝することを拒否した。そして「火の燃える炉」に投げこむとおどかされた時「主はその火の中から我々を救い出すことができる。たといそうでなくても（もしそれが神のみ心であって、火の中で焼け死ぬ結果になるとしても）王よ承知されよ。我々は他の神々に仕えず、礼拝もしません」と言明した。「たといそうでなくても」の一語千鈞の重味がある。彼等は必ずしも神の保護あるいはご利益のみを期待しない、真の忠誠的信仰を告白したのだ。結果的には神は彼らを救って下さったが、この証に打たれたネブカデネザル王は、次第にまことの神の信仰に導かれてゆく。

9月14日 今日の通読箇所 ダニエル書 4章1～18

「リカントロピイ」

リカントロピイは「狼狂症」などと訳される一種の精神病だ。「自分は何かの動物だ」と思いこんで、そのように行動する。西洋の怪奇物語に「狼男」というのがあるが、あの話の出どころもこれだと思う。ネブカデネザルは成功の絶頂時、ある夜また不思議な夢を見て悩んだ。本人にはわからないけれども、彼がリカントロピイになる夢である。成功も王位も神の摂理によって与えられた賜物だ。高ぶって良い気になってはいけない。神のみ心ならば、王といえども王座から落ちて、一匹の動物のようになってしまうこともある。それを再び回復させて王位に登らせるとすれば、それもまた神の力である。神様は彼にこういう真理を悟らせようとなさるのだ。

9月15日 今日の通読箇所 ダニエル書 4章19～37

「王の信仰告白」

この章は、ネブカデネザル王の詔勅のコピーのような形式になっている。そしてその内容は、王の信仰告白である。ネブカデネザルはあの夢について、ダニエルの解明と忠告を受けた。しかしいつかそれも忘れて一年ばかりたったある日、王宮の屋上から、王城およびバビロン市の規模を見て「これこそ私の力で建てたもの、私の威光を輝かす物だ。何たる壮観か」と言った。その高ぶりの絶頂で、不意にリカントロピイにおそわれ、以後おそらく一週間、動物のように、王宮の庭園で暮らした。家来たちも遠巻きに見守るより方法はなかったろう。病気がなおって再び王座についた時、彼は本当に神の摂理と、信仰と謙遜の真理を学んだ。そしてそれを詔勅の形で布告したのだ。私はこの王は、ダニエルらの指導によって、救われた可能性があると思っている。

9月16日 今日の通読箇所 ダニエル書 5章1～16

「ベルシャザル王の酒宴」

ダニエルはネブカデネザルの死後、不敬虔で粗暴なベルシャザル王のころは、いくらかはばかられ、うとんじられて、閑職に退いていたようだ。ベルシャザル王の酒宴は、脱線、低下、いよいよ不道徳と神をけがす方向にエスカレートして行った。そして、ネブカデネザルがエルサレムの神殿から略奪して来た、金銀の容器で酒を飲もうということになった。ここに彼の、神とダニエル、そしてその感化を大分受けた、ネブカデネザルに対する、意識的な反抗蔑視の気分を見ることができる。突然、王の正面の壁に、巨大な指があらわれて、スルスルと文字を書きつけて消えた。王を始め、一座恐怖で真青になった。そして、ダニエルのことをよく記憶していた王妃の進言によって、ダニエルが呼び迎え

られることになったのである。

9月17日 今日の通読箇所 ダニエル書 5章17～31

「メネ・メネ・テケル」

ダニエルは静かに、ネブカデネザル王が、詔勅形式の信仰告白を発表するに至った、神のお取り扱いのいきさつを語り、それを知りつつ、快樂と不道德のあまりに神を汚そうとする、ベルシャザル王の態度をたしなめた。その解明によれば、壁に記された文字は「メネ・メネ・テケル・ウパルシン」と読む。これによって、ベルシャザル王の罪は計量され、その終りの日が来て、王は裁かれ国は滅亡するということを、神がお示しになったのだ。そのころ、メデヤのダリヨスは名にし負うバビロン城を奇襲するため、水道の中に軍隊を進めていた。そしてその夜、いきなり城の中央部から戦争を展開したので、遂にバビロンは陥落し、ベルシャザル王は殺された。

9月18日 今日の通読箇所 ダニエル書 6章1～15

「毎日の祈り」

ダリヨス王はかえってダニエルを尊敬信賴し、重く用いることになったので、部下の総督たちはこれを嫉妬し、ダニエルを陥れようと、いろいろとねらったが、何を訴えるスキも、口実も見つけることができなかった。そこで仕方なく、ダニエルの忠実な信仰生活、祈りの生活を攻撃材料にする方法を研究することにしたのである。これを見ても、ダニエルがいかにすばらしい主の僕だったかと、つくづく思われるのだ。彼らの考えた方法は、事務、裁判の整理というような名目にことよせて「一切の志願、訴願を30日間停止する」という命令書を作って王に署名させることだった。「神にも」というような形容は、何気ないような調子で加えたのだろう。これは王様も一緒に落とし穴にかけたようなものだった。

9月19日 今日の通読箇所 ダニエル書 6章16～28

「獅子の穴」

臨時の勅令がそれをねらったものとは、さすがのダニエルも気がつかなかったかもしれないが、もし気がついたとしても、1日3回の公式の祈りをやめるつもりはなかった。そしてこれが「勅令に対する違犯」というかどでダリヨス王に訴えられたときは、かえってダリヨス王があわてた。王もいろいろ研究努力してダニエルを助けようとしたが、成功せず、結局勅令通り、ダニエルを獅子の穴に投げ込ませたが、その夜は食事もせず、眠れもしなかった。しかし神はダニエルを獅子の危害から守ってくださったのであった。

9月20日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 7章1～10

「賞賛された百卒長の信仰」

百卒長は、彼の頼みにしていた僕が病気で苦しみ、今や瀕死の状態でした。この時、彼はイエス様のことを聞いてユダヤ人の長老たちをイエス様の所に遣わして、彼の僕を助けて下さるようお願いしたのです。すると、イエス様は、「行ってなおしてあげよう」と言って、すぐに彼の家に向かわれたのです。そのことを知った彼は、わたしの配下の兵卒は、「行け」「来い」「これをせよ」という一言の命令を必ず実行します。イエス様に来て下さらなくても、最高の権威者であるイエス様の一言で、僕は必ずなおります。だから「ただ、お言葉を下さい」と言ったのです。イエス様は、彼のこの信仰を賞賛したのです。

9月21日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 7章11～17

「ナインのやもめのひとり息子」

イエス様と弟子たちは、ナインの町に住むやもめの一人息子が死んで、棺に入れられてかつぎ出される所に出会われた。婦人はすでに、夫に先立たれ、唯一の生きる望み、支え、慰めであった一人息子を失った。イエス様はこの母親を見て深い同情を寄せられて「泣かないでいなさい」(13節)と言われた。さらにイエス様は近寄って棺に手をかけ、「若者よ、さあ、起きなさい」(14節)といわれ、若者を生き返らせて彼の母親の手に返された。死人が生き返るといふのは、数多いイエス様の奇跡の中でも特に人々を驚嘆させた。著者ルカは、百卒長僕の癒しに次いで死人が生き返った事件を記し、神の国の福音の力が、病気を癒すだけでなく、死人を甦らせる領域にまで及ぶことを明らかにした。

9月22日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 7章18～35

「ヨハネの質問」

22節を「重い皮膚病にかかった人」と読み替えてください。バプテスマのヨハネの弟子たちは、イエス様がやもめのひとり息子を死から生き返らせた、という驚くべき出来事を、ヨハネに報告しました。ヨハネは弟子を遣わしてイエス様に質問しました。「『きたるべきかた』はあなたなのですか」と。イエス様は旧約聖書イザヤ書のみ言葉を示し、預言されたメシヤがご自身であることを明らかにしてくださいました。イエス様はヨハネについて、尊い働きを担って遣わされたヨハネだが彼にも増して、信仰によって罪を悔い改めイエス様を信じて神の子という立場をいただいた者は、恵みによって救いを受け、ヨハネよりも大いなる祝福を受ける者とされていると、教えてくださいました。

9月23日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 7章36～50

「シモンと罪の女」

この女の人は、イエス様がパリサイ人の家で食卓に着いておられることを聞いてシモンの家にやって来ました。香油が入っている石膏のつぼを持っていました。思わず溢れ流れた涙でぬらしたイエス様の足を髪の毛でぬぐい香油を塗ると、香油が部屋に香りました。この人はイエス様のお話をどこかで聞き、イエス様を信じ、罪ゆるされた感謝を表したくてやって来たのでしょうか。この時、シモンの考えをすべて知っておられたイエス様は、500デナリの借金をゆるされた人と、50デナリの借金をゆるされた人と、どちらがより感謝するだろうかと、たとえて話されました。シモンの返答は正しかったのです。しかし、罪の女のようにイエス様に感謝できませんでした。なぜなら罪の自覚とゆるされた喜びを知らなかったからです。

9月24日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 8章1～15

「福音に仕え、福音に聞く」

8章に一貫して流れているものは福音を聞き、その人生を変えられた人々の物語である。イエス様と12弟子たちは神の福音を伝えつつ、町々村々を巡回していた。この伝道団の生活を支え奉仕したのは、婦人たちで、後に彼女たちは復活の証人ともなる。続いて有名な種まきの譬が記されている。弟子たちの質問に対して、イエス様は丁寧に答えた。イエス様は、道ばたに落ちた種のような、かたくなな人ではいけない。また、岩の上に落ちた種のように、表面的な一時的熱狂者であってもいけないし、根のないような幻想家でもいけないという。そしていばらの間に落ちた種のように、二心であってもいけない。なぜなら人は神と富とに兼ね仕える事ができないからだ。要するに、良い地に落ちた種のように、良い心で、御言をしっかりと聞く事だ。

9月25日 今日の通読箇所 ルカによる福音書 8章16～21

「イエス様の家族」

種まきの譬のあとの「あかり」「隠されているもの」「持ちもの」の譬は、三つとも神の国の奥義である神のことばに関係している。みことばは、はいつて来る人々を照らすべきであり、「隠されている」みことばは、やがて公に伝道されねばならない。また、みことばを聞いただけで「持っていると思って」いてはいけないのである。続いてイエス様の家族について記している。家族はイエス様の存命中には、同調していない。マルコによる福音書3章21節によると、近親の者たちがやって来て、「イエスを取り押さえに出てきた」とある。彼を気が狂った人と思い込んだからである。マタイによる福音書10章36節では、イ

イエスは弟子たちに「家の者が、その人の敵となるであろう」と警告している。

9月26日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 8章22～25

「嵐の中で」

イエスが「湖の向こう岸へ渡ろう」と言われましたので弟子たちは主のお言葉に従ってガリラヤ湖に舟を出しました。イエス様も一緒にお乗りになりました。しかし、思いがけず、突風が吹き嵐になったのです。イエス様のお言葉に従って悔い改め信仰生活に進みました。学び、働き、家庭を築き、事業を成し、生活は進んでゆきます。目には見えませんが主が共にいてくださいます。なんとという平安と幸福でしょうか。しかし、思いがけない困難に遭遇します。子供たちの健康、勉学、人間関係、家庭や会社での困難、これらは主が共にいてくださってそのうえで出会う事柄です。主が風と荒波をおさめ、なぎにしてくださったとき、改めて、主が共にいてくださった、と恵みを知るのです。願わくは嵐のただ中で、主の愛と真実はいつも変わらない、と信じて御名を呼び求めたいものです。「悩みの日にわたしを呼べ、わたしはあなたを助け、あなたはわたしをあがめるであろう」(詩篇50篇15節)。

9月27日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 8章26～39

「神のみもとへ」

嵐を静めたイエス様は、全てを治めておられる全能の神様です。弟子たちはイエス様のみ力に驚きました。この悪霊につかれた人は、自分を救うこともできず、悪霊の思うままに大変な毎日を送っていました。イエス様は彼から悪霊を追い出してくださいました。鎖に繋がれても鎖を断ち切って荒野にいた人が、今は着物を着て正気になってイエス様の足もとに座っていたのです。わたしたちも、悔い改めイエス様を信じ、イエス様に心に住んでいただくまでは、悪霊の支配の元で生きているのです。主はパウロを遣わしこう言われました。「彼らの目を開き、彼らをやみから光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰らせ、また、彼らが罪のゆるしを得、わたしを信じる信仰によって、聖別された人々に加わるためである」(使徒行伝26章18節)。

9月28日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 8章40～56

「ヤイ口の娘の甦りと長血の女の癒し」

ここには、会堂司ヤイ口のひとり娘の甦りと、12年間、長血をわずらっていた女が癒された記事が、組み合わせられた形で記されています。当時、会堂司が青年宗教家のイエス様にひれ伏すとは異例のことでした。この会堂司にこうさせたのは、12歳になるひとり娘が死にかかかっていたからです。しかし娘は、

イエス様が着く前に亡くなりました。途中で、12年間長血をわずらっていた婦人のことが記されています。この婦人もまた何とか病気を治そうとしましたが癒されず、イエス様に救いを求めてきたのです。イエス様はヤイロの娘を甦らせ、婦人の病を癒されました。そしてこの人たちに求められたのは、不可能を可能にする神様に対する信仰です。

9月29日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 9章1～9

「12弟子の派遣」

イエス様は、弟子たちに特別な賜物をお与えになって派遣された。この派遣は、以前よりも厳しいものだった。イエス様は12弟子たちに、三つの命令を授けている。第一は、「旅のために何も携えるな。つえも袋もパンも銭も持たず、また下着も二枚は持つな」。第二は、報いられる権利があるから「どこかの家にはいったら、そこに留まっておれ」。第三は、迎える家もない町には、「足からちりを払い落しなさい」。この伝道の結果、民衆はイエス様を、ヨハネ、エリヤ、預言者の再来と認めて、新しい時代のしるしを見た。それで領主ヘロデは「ひどく当惑し」「イエスに会ってみよう」と思ったのである。なぜなら、ヨハネ再來說の唱道者は彼自身でしたから、イエス様を危険人物として、この時に抹殺してしまいたかったのかもしれない。

9月30日 今日に通読箇所 ルカによる福音書 9章10～17

「天を仰いで祝福し」

弟子たちは神の国を宣べ伝え病気をなおすためにつかわされました。彼らはイエス様にその報告をしました。その後イエス様は弟子たちを連れて、ガリラヤ湖畔のベツサイダに退きましたが、ついて来た人々になお神の国について話し、病気をいやしてくださいました。気づくともう夕暮れでした。解散するように言う弟子たちにイエス様は「あなた方の手で食物をやりなさい」とおっしゃったのです。弟子たちが「パン五つと魚二ひきしかありません」と答えるとイエス様は、群衆を五十人ずつ組にして座らせなさいとおっしゃいました。男の人だけでも五千人いたのですから、百組はできたことになります。イエス様は天を仰いで五つのパンと二ひきの魚を祝福してさき、配らせたのです。人々は満腹し、残りは十二かごありました。